

現代文・古文・漢文の連携を図る
(三年次計画の一年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

平田 知之・石川 祐爾・鹽谷 健
鈴木 信好・須藤 敬・関口 隆一
福田 孝

現代文・古文・漢文の連携を図る

(三年次計画の一年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

平田 知之・石川 祐爾・鹽谷 健
鈴木 信好・須藤 敬・関口 隆一
福田 孝

I はじめに

本校国語科では本年より三年間にわたって「現代文・古文・漢文の連携を図る」という主題で研究に取り組むことにした。本稿ではその初年度として、そのような主題を設定した経緯、さらに主題を踏まえた試行的実践例を報告したいと思う。

II 主題設定の理由

今回の主題を設定した第一の理由は、授業時間数の減少である。

本校国語科では昨年度まで6年間にわたって「中・高6ヶ年を見通した古典の教材編成」という主題で研究を実施してきた。そこではまず古典学習についての意識調査を行い、10年前の調査と比較した上で、生徒の文法力の低下、古典全般に対する興味・関心の減退を指摘した。また古典学習の前提となる素養調査を「住居・服飾の名称」「いろはガルト」「小倉百人一首」を例にとって行い、生徒が古典に関して共通の知識の基盤を持ち得ていない現状を指摘した。それらの結果を踏まえ、中学段階では絵巻物を教材に用い、生徒に古典の世界へ親近感を持たせ、減退傾向にある古典への興味・関心を喚起する教材編成を提示した。さらに高校段階では季節感を主題にした単元学習を組み、生徒から失われつつある古典の世界の伝統を理解させるように試みた。最後に、その際のカリキュラム編成の留意点として以下の三点を掲げた。第一に、これまでのような教科書に依存するだけの授業では古典の授業を成立させることが難しいこと。教科書教材は有名作品に偏りがちであり、とられる文章も短いものが多く、相互の関連づけに乏しい。そのため、授業者の工夫なしには、生徒の興味を引く授業が成立させにくいと考えられるのである。第二に、古典教育には修養が必要であること。伝統的な古典の感受性を教え導くためには、授業時数の減少もあって、生徒主体の授業を実施して行く余裕が無く、場面に応じて暗誦などを行う必要を感じている。第三に、教材の系統性を考慮して、効率よく編成する必要があること。本校の高校一

年次では古文の授業が週一時間しかないことを踏まえて、語法や内容をよく吟味した教材の精選が今後必要である¹⁾。

以上に抄録した研究プロジェクトで常に底流にはらんでいる実際的な問題は、授業時数の減少である。上に掲げた三つの留意点はすべてその問題に関わり合っている。教科書教材が有名作品に偏り、短い文章が多いのもそのためであるし（実際、「国語Ⅱ」が準必修でなくなってから、旧「国語Ⅱ」と「古典」の教材が「古典Ⅰ」へ集約されてバラエティに乏しくなった印象があるし、次期指導要領で「古典Ⅰ」「古典Ⅱ」が「古典」へ統合されて、その傾向がさらに加速するのではないかと危惧している）、生徒主体の授業よりも一斉の暗誦指導が効果を上げるのも、教材の効率的な編成が求められるのも、授業時数が減少している問題に大いに関係している。

本校では高校生のカリキュラムで古典に十分時間を割くことが難しい実態を踏まえて、中高一貫教育のメリットを生かし、中学生に意識的に多く古典を読ませている。しかし、本年度に発表される次期学習指導要領では、中学の国語の時間は現状より週1時間程度減少することは確定的で、今後中学生に多く古典の授業時間を割くことは難しいものと思われる。

このような状況下では、「現代文」「古文」「漢文」それぞれがバラバラのカリキュラムを立てていたのでは効率が悪い。本校ではそれぞれ授業を専門の教諭が担当し、各人が用意した教材を国語教科会で集約して年間指導計画を立てていたが、今後は同一学年を担当する複数科目の教諭が相互の教材の内容に踏み込んで、教材の連携をはかり、より効率的な指導計画が立てられるように、教材編成をし直す必要があると考えられるのである。

主題設定の第二の理由は、新学習指導要領の目玉である総合化への対応である。

子どもたちに「生きる力」をはぐくむために、問題解決能力を高める、横断的・総合的指導を推進して行く必要性は高まっている。新学習指導要領では、各教科の教育内容を厳選することによって一定のまとまった時間を生み出し、「総合的な学習の時間」を中学・高校ともに設けることとされている。総合的な学習活動を実現させるためになにより必要なのは、やはり国語力である。それは単に各教科の学習に用いるのが日本語である、ということではなく、膨大な情報の中から必要なものを取捨選択し、再構成し、発信するという総合学習を行うために必要な力が、国語の学習を通して高めて行く「読む」「聞く」「書く」「話す」という四つの力であるからであり、これらの力はとりもなおさず「生きる力」そのものにつながるものだからである。従って、国語の授業の中でも各教材を孤立させることなく、連携し、総合的な学習に必要な国語力を高めるための工夫をしなければならない。

Ⅲ 現代文・古文・漢文の連携を図る上での基本的な考え方

昭和57年度より実施された学習指導要領で、それまでの「現代国語」「古典Ⅰ甲」（または「古典Ⅰ乙」）が「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」に再編成され、現代文と古文・漢文が総合された科目が誕生し、一人の教師が各教材を総合的に扱うことが可能になった。実際、それぞれの単元ごとに現代分野、

古典分野双方にわたる教材が配置され、総合化の理想に燃えた教科書もいくつか出版された。しかし、学校教育現場では、相変わらず「現国」と「古典」を別々の教師が担当し、教材も両方で縦割り分担して用いられることが多かった。平成に入ってから、現代文・古典が入り乱れて編集されている教科書が存在感をなくし、「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」に現代文と古典がに分冊になっている教科書が編集され、一定数採用されていることは、その何よりの証左である。なぜ「現代文」と「古典」の総合化が浸透しなかったのかは、詳細な分析が必要であろうが、ここではそれは問わない。ただ、上述のような、ある単元のもとに「現代文」と「古典」の各教材や、いわゆる「現古融合文」を配置するような方法では、旧来「現代文」「古文」「漢文」が抱えていた独自性を発揮できず、特に入門期のなどにおいて指導の焦点がぼやけがちであったことも否めないと考えられる。そこで今回の研究プロジェクトではそのような形の「融合」は行わないこととした。「現代文」「古文」「漢文」が従来の授業の枠を持ち、それぞれの独自性を主張しながら、相互の教材の関連をはかり、教材の精選、授業時間数の減少にも対応しながら、指導の質を落とさないようにする教材や指導方法の研究を行うこととした。

国語科における「総合学習」の形態を、神戸大の野上教授は次のように分類している²⁾。

(1) 教科「国語」の中で、担当教師が教科「国語」の時間の中で行う

(2) 「国語」の教師が、他の教科の教師と総合的な学習について検討し、担当するそれぞれの教科学習の中で、役割分担して行う

(3) 教科学習とは別枠の時間で総合的な学習を行うが、「国語」の学習でも総合的な学習と関連する学習活動を展開する

(4) 教科学習とは別枠の時間で総合的な学習課題を扱い、教科「国語」の時間との関連は持たせない。

今回私たちは、(1)の形態の学習指導を行うわけだが、その際、一人の「現代文」(もしくは「古文」「漢文」)教師が、自身の担当科目を中心に据えて、他科目との連携をはかり、総合的な指導を行う方法と、複数の「現代文」「古文」「漢文」担当教師が、それぞれの扱う教材を連携して編成し、それぞれの授業で役割分担して指導する方法がある。後者は上記(2)の分類に近い形かもしれない。本年の実践例はその両者の形を試みているが、最終的には後者のような形の指導・教材編成を目指している。次頁以降の実践例は、1997年11月14日の本校第24回教育研究会において実施されたものである。

IV 試行的授業の実践報告

(1) 中学・現代に息づく江戸のことば

(日時) 1997年11月14日(金) 第1校時

(授業者) 平田知之

(授業クラス) 本校中学2年C組 男子41名

(研究テーマ) 現代文・古文・漢文の連携を図る ～古文

(教材) 江戸の小咄 ～醒睡笑, きのはけふの物語, 鹿の子餅 ほか～

(単元設定の理由)

現代の生徒にとって、古典の世界に登場するような生活様式には実感がない。しかもその傾向は年々強まり、そのため古典指導の困難さが、ますます指摘されている。

しかし、江戸時代に多く出版された読み物には、庶民を読者として想定し、庶民の暮らしを活写したものが少なくない。また、特に、小咄本に見られる、会話を中心に展開される作品は、当時の口語に近いことばが用いられ、現代の我々の生活に引きつけて読むことが比較的容易である。中学校では入門期を除いて教材化されることが多くない近世文をあえて取り上げるのは、そのような理由による。

(教材選定の理由)

竹取物語の素朴な洒落の数々に見られるように、笑い話の淵源は古く、現代に至るまで、形を変えながら脈々と伝わっている。多くがその場その場の語り手と聞き手の関係の中で語られる口承的な文学で、書物に残されたものは少ない。記録性が少ない分、伝統的な文学観の支配からは比較的自由で、当時の時代性や世相を反映しやすく、また口語体に近い文体が多く用いられていることもあって、生徒が現代の事象と結びつけて理解することが比較的容易である。

旧来も「星取棹」「文盲の犬」(醒睡笑)などが、中学校の教材として取り上げられてきた。ただし、収録されている小咄自体は、簡潔な表現とも相まって、現代っ子である生徒の興味を引くようなおもしろいものだとは言い難い。ところが、これらの小咄の中で、落語を代表とする現代の話芸の中に息づいていて、今なお現代の観客を楽しませているものがある。落語は「子ほめ」などが中学校の教材に若干取り上げられている。今回は小咄そののみを扱うのではなく、現代文の教材となりうる落語との関係を考え、現代の話芸に江戸小咄がどう息づいているのかを比較させることにより、それらの咄が現代でどのように生かされているのかを感得し、現代の生活に息づく江戸時代の生活様式を、生徒に理解させようと試みた。

(指導目標)

- ① 江戸時代の生活やことばに対する興味関心を高める
- ② 江戸小咄と現代の話芸を比べることによって、江戸小咄が現代の話芸にどう生かされているかを理解させる
- ③ 江戸小咄と現代の話芸を比べることによって、江戸時代の生活様式が現代にどのように形を変えて生きているかを理解する。

(指導計画) 2時間

1時間目 『醒睡笑』という書物について知り、当時の読者がおもしろいと考えたことがどのようなことかを考えさせる。

2時間目 『醒睡笑』と同話をあつかっている落語を聞き、『醒睡笑』中の表現が落語でどのよ

うに描写されているかを確認し、両者を比較する。

(本時の指導計画) 2時間計画の2時間目

導入 小咄「花見の葉」の内容を整理し、おもしろいと考えられる点を指摘させる。

展開 1 落語「二番煎じ」をテープで聴き、小咄との筋上の相違点を指摘させる。

2 導入で確認した「おもしろさ」が落語の中ではどのように表現されているかを確認させる。

3 現代の話者が、江戸時代の様子を現代の聴衆に理解させるために、どのような工夫をしているか、考えさせる。

まとめ 現代の我々の生活と、江戸時代の生活がどのようにつながっているかを、考えさせる。

(まとめと今後の課題)

生徒は予想外の授業展開にとまどっていた様子ではあるが、熱心に小咄と落語を読み・聴き比べていた。落語に関しては「聴く」ことに集中させるため、内容を活字に起こして生徒に読ませることをしなかったが、詳細は比較をするためにはやはり文字資料も必要だったかもしれない。

古典離れが指摘される現代の生徒の中にも、古代から続く言葉の力は脈々と生きている。今回は教材自体がやや特殊なものであったが、生徒にそのことを体感させる一つの機会にはなったであろうと思われる。今後は、現在採用されている古文教材をより細密に検討し、より普遍的な部分で現代の子らに痕跡を残している古典のことばを指摘し、生徒の古典に関する興味関心を揺さぶりたいと考えている。

A きのふはけふの物語下67 上京に、平林といふ人あり。此人の所へ、あるより文をことづかる。此者ひらばやしと云名をわすれて、人によませければ、「たいらりん」とよむ。「そのやう成名ではない」とて、又余の人に見せければ、「これはひららん殿」とよみける。「是でもない」とて、またある者に見すれば、「八十木」とよむ。「此うち外れじ」とて、後にはこの文を笹の葉に結び付けて、襦袢を腰につけて、「たひらんかひらんか、一八十八にばくばく、ひやうりやひやうりや」と囃し事をして、やがて尋ねあふた。

B 鹿の子餅・蜜柑 分限な者の息子、照りつゞく尋にあたり大煩ひ、なんでも食事すまねば、打寄つて、「なにぞのぞみはないか」との苦勞が、「何にも食いたうない。そのうち、ひいやりと蜜柑なら喰ひたい」と好み。安い事と買にやれど、六月の事なれば、いかな事なし。ここに須田町にたつた一ツあり。一ツ千両、一文ぶつかいても売らず。もとより大身代の事なれば、それでもよりとて千両に買、いさあ、あがれと出せば、むす子うれしが、まへらかうへ起上り、皮をむいた所が十袋あり。にに七袋くひ、いいやも美味さてとよもいへぬ。「これはお袋様にあけてたも」と残る三袋手代にわたせば、手代その三袋をうけ取つて、みちからかけ毒。

C 鹿の子餅・薬田 薬田ながれて釜山海の湊へ寄る。唐人見つけ、「替つた物がながれて来た」と取撥、大勢あつて、「是はまあ何であら」とと評議まももち。中でも知恵のあるやつが、「いふは、これはわざとて日本の道具にや。その中では、この恰好、大かた兜であらう。それにながりはあつても、側から、兜にしては口が附てある。しかも長く附て居る。是はまたたつた物でや」との不審。「ハナはたつた毒、これをかかると耳がやむがる。その時腐から物をいふ、その口は」なるほどそれでよめた。しかしそんなら両方にありやうなもの、(「しちのらにはない。こりやとどうであらう」それもしれた事、寝ころぶ方向)。

D 聞上手・座 むす子がたてをあげるにあがらず。親父出て、「これだけおれがあげ付けてやらふ。向ふの河岸へもつてい」とと小値をつれゆき、一かけ走るとよくあがる。親父おも

るがり、引たりしゃくつたり余念なし。「コレ父さん、もふおれにくんねいくんねい」とせつけば、「エ、エ、やかましい。我をつれてこねばよかつた物」。

E 薩摩笑・巻一・鈍獅子 いはんかたなき鈍なる弟子あり。檀那のあつまりて、茶うけなどある座敷に、年輩数のあるは、常のならひなり。しかるにかの弟子、ややもすれば、いまだ三十の巻をば四十と見損じ、五十ばかりの巻をば、六十余りと見そこなうて笑はるるを坊主聞きかねて、「うつけに葉がないとはまことや。われも人も、年の寄りたきはなし。誰を若いといはんこそ本意ならぬ。あなかし、粗忽に人を年寄といふな」と教へられ、あけの日の、かの弟子使僧に行き、女房の子を抱きあるを見付け、「この御子息はおいくつにてありや。」「これは、こし生れ、片子でおいらある」と答へけり。弟子、「さ、かた子には若く御座ある」と。

F 付らけらわらひ・田楽 手代ども主の留守に集り、田楽を食はんとて、あぶり豆腐やへいひつけけり。未だ食はぬ先日那掃りければ、手代どもいかがせんと思ふところへ門を敲きければ、旦那聞いて、「誰ぞ」といふ。「辻から参りました。焼けました」といふ。旦那肝を潰し、「それは何程焼いた」といふ。「二十焼けました」といへば、やれ大火事よ、と騒がれた。

G 鹿の子はなし・花貝の薬 牛島の禪寺に珍しき花あり。是へ参らんとて急ぎ、程なく門になれば、番の者立出て、「その吸筒は酒さうな。酒は此内へは入れぬ」といふ。「いや是は酒にてはなし。此書き人煩ひにて候故、行く先々まで薬を煎じて行く」といふ。「然らば飲みて見ん」といふ。やがて大茶碗に「つとへければ、」此薬は大分地黄が入りたさうな「といふて通しけり。さあさあ仕澄したぞとて、思ふやうに見物して、大酒に酔ひ、早帰らんと思ふ所に、又番の者来りていふやう、「先程の薬の二番まだ上がりませぬか」といふて来た。

H 鹿の子はなし・正月福初 福初に、お互に小福なりとも一切つと福はうといふことになら。一人のもの、己は高砂やこの浦舟に帆を上げてとばかり覚えてゐる。といふ。さらばそれだけなとも福へ、後は皆が続けよう、といふこととて、その男も仲間に加つた。さて、高砂やこの浦舟に帆を上げて、と福つたけれども、調子の外れてゐるのに人々あきれて、附けようともしない。弱つて、今一度、高砂やこの浦舟に帆を上げてエ、と引張つて見たけれども、誰も何ともいはず。うるたへたあまりに、助け舟、といふた。

(2) 「言葉の力」

(日時) 1997年11月14日(金) 第2校時

(授業者) 関口 隆一

(授業クラス) 本校中学1年3組 男子41名

(研究テーマ) 現代文・古文・漢文の連携を図る ～現代文

(教材) 大岡信「言葉の力」(本文は岩波書店『『世界』主要論文選』による)

(単元設定の理由)

現教育課程、さらに今後予定されている新教育課程では、ますます授業時間の圧縮が求められるような勢いである。本校では昨年度まで中・高6ヶ年を見通した古典教材の編成を研究テーマとしてきたが、今年度は、古典を単独で扱うだけでなく、他の科目も含めて相互の連携をはかることをテーマとして掲げた。

「言葉の力」は発表以来広く教材として中学から高校まで用いられているが、今回は詩の単元から谷川俊太郎の詩論を経て、この「言葉の力」まで、主に詩から言葉の問題を考える流れの中で扱った。右文書院「高等学校 国語Ⅰ」には近・現代の4人の詩人(三好達治・伊東静雄・草野心平・谷川俊太郎)の作品が一作ずつ収録されており、それぞれの詩人の他の作品の紹介も含めて読み進んだところで、谷川俊太郎の「世界へ! -an agitation」を取り上げ、作者と読者の関係、言葉の問題に目を向けさせた。この文章は現代の詩人の問題を取り扱っており、その問題に対する筆者の考え方を示すと共に近代詩人批判にもなっているが、生徒には読者の立場からその問題を考えさせることを狙っている。

「言葉の力」では、筆者が言葉の問題を取り上げるのに詩から入っていることもあるので、それに合わせて読解を進めていく予定である。本文中には古典和歌を取り上げている部分があるので、それが今回のテーマ設定に直接関わる部分となる。但し、現代文と古典との連携を考えるためには、直接の引用や影響関係の確認にとどまるのではなく、むしろ日本語・日本文学に対して歴史的なつながりの実感を持てるようになることが重要であり、それに関わる点として、今回は詩歌の受容の場の相違に目を向けさせたい。

(授業展開) 全10時間(詩の授業は省略した)

- | | |
|-----|--|
| 第1時 | 「世界へ! -an agitation」前半の読解
詩人と読者の基本的な関係の理解。生活の場での詩の受容について。 |
| 第2時 | 「世界へ! -an agitation」後半の理解
一つ目の「ジレムマ」。詩人の社会性についての理解。 |
| 第3時 | 「世界へ! -an agitation」後半の理解
二つ目の「ジレムマ」。ことばの二重性についての理解。 |
| 第4時 | 上の文章を踏まえた、詩に対する考えのまとめ。 |
| 第5時 | 「言葉の力」読解。 |

「つつましい言葉の大きな力」 1回目。古代の詩の持つ力についての理解。

第6時（本時） 「言葉の力」読解。

「つつましい言葉の大きな力」 2回目。

第7時 「言葉の力」読解。

「つつましい言葉の大きな力」 3回目。古典の持つ性質についての理解。

第8時 「言葉の力」読解。

「言葉の水面下の部分」 1回目。「氷山の一角」としての言葉の理解。

第9時 「言葉の力」読解。

「言葉の水面下の部分」 2回目。「言葉のささやかさ」についての理解。

第10時 「言葉の力」まとめ。

（本時の計画）

目標 1 「言葉を贈り物にするという思想」について理解させる。

1 和歌の贈答に見られる詩歌のあり方を、現代と対比させて考えさせる

展開 1 前回の授業の確認

2 内容把握

① フランス語の「贈り物」についての読解。

② 和歌の贈答の場面についての読解。

③ 現代の詩歌に対する見方からの考察。

（他科目との連携）

本年度の高校一年は現代文・古文・漢文の三人で授業を担当しているが、今回の授業ではそのうち1学期の古文で扱った「伊勢物語」との連携を念頭に置いた。1学期の古文では入門教材の今昔物語に次いで、「伊勢物語」筒井筒の段を扱っている。これは幼なじみの男女の和歌の贈答が中心に据えられていて、「大和の女」「高安の女」それぞれの歌の詠みぶりとそれに対する男の反応が対照的に描かれている。本校研究報告第37集で、多くの教科書にとられている「伊勢物語」の教材としての扱いにくさが指摘されているが、今回の「言葉の力」のような教材を取り上げて相互に理解を深めることは、扱いにくい古典教材を効率的に指導するための一つの処方箋になるものと考えられる。

で述べたものではないか、と思つた。それは正岡十郎の寄

定論の影響もあつたが、それだけでなく、読んでい

たらにそのもの性質に求むていた。つまり、その

「音楽」は何か、「音楽の本質」として、その

を分かつてくれるものを、こゝに見つけようとした

た。そして「音楽」そのものの中に入らずに、その

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

その背後に大きなものが見えてくるまでは、古典作品

とどういふものは、言つたれば自然である。しかも

の心がその世界にたいして、開くならは開かないもの

は、それは、それなら、考えられるのは考えられない

ものになつて、あつた。これは、その、その、その

大衆にたいして、あつた。これは、その、その、その

かである。しかも、その考えられるのが考えられない

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

その中では、自然科学や哲学や美術その他、百科全書的な分

項のものでその断片をおびたしく述べられているが、

そのなかに私をとりこむべき音楽がある。見えないものは

見えないものになつて、あつた。これは、その、その、その

かである。しかも、その考えられるのが考えられない

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

の「ノヴァリス」の流行するある思想を語るのに、ま

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

「音楽」の「音楽」そのものの中に入らずに、その

はなるべく聞かないほうがいいという気持ちも一方ではあるは
どが、持とか茶どかいうものは、言ってみればこの開か
ずの扉を何ものか大いなる力の助けによって開けて、こ
ういふ衝動に支えられているものであろう。

結局、言葉というものの大切さは、それが人間のこころ
奥にも深く開くものであるという点にある。言
葉が、そのものとして絶対的に大事だということではない。
もちろん、言葉は人間の大事な持物だけれども、それは言葉
というものが、なぜかわからないけれども、人間のなかに思
想や感情を呼び起こす力を持っているものだからであつて、
一語一語を物神聖的にあがめてみても、言葉の命にふれる
ことはできない。

教育心理学という領域の庄になるが、ある観察の対照の中
に、私は今、静けさを感じています」という言葉を書い
てきたといふ。それで、この少女が一つの政府を通過し
て、精神的に大人の世界に入ったという判断を医師は下し
たといふ話を訊んだことがある。この話はなかなか面白い
と思つて記憶している。私たちが「聞く」といふときは、物
音を聞くというのが普通だが、逆に、物音の地えた「静寂」
を「聞く」といふ行が、この話の場合だけでなく、すべて
の人に對して、決して馬鹿げたことではなく、むしろ精神の

より深い部分の目覚めを意味しているという事実は暗示的だ
である。「聞こえるもの」に「なつて」いる。「聞こえないもの」
の裏面的な把握が、この少女に今起つたわけである。そし
て、そのことを告げる彼女の言葉は、単純なものであるとい
いが、その単純な言葉が引き出すところの世界は大きく
くて深い。「パスカルの『パンセ』のよきな本が即座に大
私をうつもの、パスカルの短い言葉が、それを強調させてい
る深い氷山の下の世界をようようかがわせるに足る力をもつ
ているからであらう。

美しい言葉とか正しい言葉とか言われるが、単独に取
出して美しい言葉とか正しい言葉とかいうのはほんのち
はしない、それは、言葉といふものの本質が、口先だけの
もの、指差だけのものではなくて、それを発している人間全
の世界をいよいよ背負つてしまふところにありからであ
る。人間全体が、ささやかな言葉の「う」に反映してし
まうからである。そのことに関連して、これは実は人間世界
だけのことでなく、自然界の現象にさういふことがあるの
ではないか、といふことについて語っておきたい。

京都の建仁に住む染色家志村くみさんの仕事場で拾つて
いた片、志村さんがなんとも美しい藍色に染まった糸で織つ
た着物を見せてくれた。そのピンクは、淡いようであつて、し
かも感えるような強さを内に秘め、はなやかでも深く落

着ている色だ。た、その美しさは目と心を欺くこむように
感じられた。「この色は何から取り出したんですか、一花か
らです」と志村さんは答えた。素人の気安さで、私はすぐに
花の紙ひらを煮詰めて色を抽出したものだと思つた。実
際には花の皮から抽出した色だ。あの黒っぽい
ゴツゴツした皮の皮からこの美しいピンクの色がとれるのだ
といふ。志村さんは続けてこう教えてくれた。この藍色は、
一年中どの季節でもとれるわけではない。花の花が咲く直前
のころ、山の桜の皮をもらつてきて染めるのだ、上質
したような、えもいわれぬ色が取出せると、
私はその話を聞いて、体が一瞬ゆがむような不思議な感じ
におそわれた。畢竟、もつともなく花となつて咲き出でよう
としていた桜の木が、花びらだけでなく、木全体で感動にな
つて最上のピンクの色にならうとしている姿が、私の脳裡に
ゆらめいたからである。花びらのピンクは、幹のピンクであ
り、樹皮のピンクであり、樹液のピンクであった。桜は全身
で春のピンクに色づいて、花びらはいはばそれらのピン
クが、ほんの尖端だけ姿を出したものにすぎなかった。

ような人がそれを由木全身の色として見せてくれると、はつ
と深く。
このように見れば、これは言葉の世界の出来事と同じ
ことではないかといふ気がする。言葉の「一語」は、花の
花びら一枚だと言つていい。一見したところ、さうせん別
の色をしているが、しかしほんのち全身その花びらの色
を庄み出している大きな幹、それを、その一語一語の花びら
が背後に背負つていのである。さういふことを念頭に置き
ながら、言葉といふものを考へる必要があるのではなからう
か、さういふ態度をもつて言葉の中で生きていこうとするこ
と、一語一語のささやかな言葉の、ささやかさそのものの大
きな意味が裏感されてくるのではなからうか、それが、言葉
の力」の端的な証明でもあらうと私は思われる。
（愛知縣文化館における一九七九年九月二日の講演筆記に加
筆したものである。）

昔、あなわたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、

おとなになりければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女

をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはずれども聞か

なむありける。さて、このとなりの男のもとよりかくなむ、

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返へ、

くらゝこしかりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあへんき

など言ひ言ひて、つひに本意のいとくあひにけり。

かへ年つひひかまほほどに、女、親なく、頼りなくなるままに、むらとむ

にいかかひなべてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、行き通を所

いでまにけり。まにけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもな

く、いだしやりければ、男、こころありてかかるにやあらむと思ひうた

① 昔、あなわたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、
 ② おとなになりければ、男も女もはぢかはしてありけれど、男はこの女
 ③ をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはずれども聞か
 ④ なむありける。さて、このとなりの男のもとよりかくなむ、
 ⑤ 筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに
 ⑥ 女、返へ、
 ⑦ くらゝこしかりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあへんき
 ⑧ など言ひ言ひて、つひに本意のいとくあひにけり。
 ⑨ かへ年つひひかまほほどに、女、親なく、頼りなくなるままに、むらとむ
 ⑩ にいかかひなべてあらむやはとて、河内の国、高安の郡に、行き通を所
 ⑪ いでまにけり。まにけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもな
 ⑫ く、いだしやりければ、男、こころありてかかるにやあらむと思ひうた

がひて、前裁のなかにかくれあて、河内へいぬるかほにて見れば、この

女、いとよう化粧して、うちながめて、

風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ

とよみけるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へも行かずなり

にけり。

まれまれの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、い

まはうちとけて、手づから飯匙とりて、筒子のうつはものにもりけるを

見て、心憂がりて、行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方

を見やりて、

君があたり見つつを雇らむ生駒山雲なくしそ雨はふるとも

と言ひて見いだすに、からうじて大和人来むと言へり。よろこびて待つ

に、たびたび過ぎぬれば、

君来むといひし夜ごと過ぎぬれば頼まぬもの恋ひつつぞ経る

と言ひけれど、男すまずなりにけり。

⑬ がひて、前裁のなかにかくれあて、河内へいぬるかほにて見れば、この
 ⑭ 女、いとよう化粧して、うちながめて、
 ⑮ 風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ
 ⑯ とよみけるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へも行かずなり
 ⑰ にけり。
 ⑱ まれまれの高安に来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、い
 ⑲ まはうちとけて、手づから飯匙とりて、筒子のうつはものにもりけるを
 ⑳ 見て、心憂がりて、行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方
 ㉑ を見やりて、
 ㉒ 君があたり見つつを雇らむ生駒山雲なくしそ雨はふるとも
 ㉓ と言ひて見いだすに、からうじて大和人来むと言へり。よろこびて待つ
 ㉔ に、たびたび過ぎぬれば、
 ㉕ 君来むといひし夜ごと過ぎぬれば頼まぬもの恋ひつつぞ経る
 ㉖ と言ひけれど、男すまずなりにけり。

V まとめと今後の展望

本年度の二つの授業例は、現代文と古文・漢文の連携を図る上での、ほんのささやかな試みである。本年度は年間指導計画が決まった跡でのテーマ設定であったために、ごく個別的に各科目の連携を図る模索をするところで終わってしまったが、最終的には年間を見通した、各科連携の方法について、研究を進めなければならないと考えている。なお、漢文に関わる実践は、次年度に行われる予定である。

注)

- 1) 本校研究集録第32集～37集に記録が載せられている。
- 2) 「横断的・総合的な学習が求める国語教育」月刊国語教育1997年9月号)

(参考文献)

- 『現代詩文庫27 谷川俊太郎』(思潮社) 『現代詩文庫1017 伊東静雄』(思潮社)
『現代詩文庫1024 草野心平』(思潮社) 『現代詩文庫1038 三好達治』(思潮社)
『昭和文学全集第34巻 評論随筆集Ⅱ』(小学館)
『昭和文学全集第35巻 昭和詩歌集Ⅱ』(小学館)